

## 中学校における教科体育の経営に関する研究

—— 効果からみた選択制の意思決定について ——

畑 攻・宇 土 正 彦・山 本 俊 彦\*

### A Study on the Elective System\*\* of Physical Education in Junior High School

Osamu HATA, Masahiko UDO and Toshihiko YAMAMOTO\*

As one of new managements in classes of Physical education based on the revised School curriculum recently, the elective system has come into public attention.

The purpose of this paper was to investigate social performance and operational performance of the elective system.

In order to measure performance, the questionnaire regarding cognition to sports, interest in sports, the level of satisfaction to physical education class, and contents of games was constructed.

Multivariate statistical analysis procedures were applied, and the following results were obtained.

1. The ability, cognition and interest to sports among the students were covered by introducing the elective system in junior high schools.
2. Desirable performance of teaching-learning in the elective system tended to be life-long sport which was important in our modern society.
3. Students' cognition and ability of sports were most important for introducing the elective system.
4. It is necessary for learning methods in the elective system to provide an opportunity to the achievement with their intention to the games.

\*\* the elective system : an optional course system, the system that students select sports subjects.

#### 緒 言

すべての生徒に運動の特性にふれる楽しさを味わって欲しい、この目標のもとに、各発達段階に応じた学習指導のあり方が求められている。

とくに、中学校・高校の段階では、選択制（生徒が種目を選択して行なう学習指導の方法）が実施されるようになり、注目を集めている。このことは、発達段階が進んだ中学・高校期では、運動スポーツに関する興味・関心、技能の習得、知識

\* University of Tsukuba Junior High School at Otsuka.

や理解などの生徒の個人の条件が多様化し、いわゆる個人差・個性化が顕著になることと関連している。

この個人差に対しては、もはや、通常の授業ではすべての生徒に特性にふれる楽しさを味わわせることが、困難である<sup>1)</sup>とされるからである。そこに、運動の特性を重視する今日の体育の学習指導の基本的な立場からの選択制の必要性が考えられる。

又、一方で、この段階における「個性化」に着目し、それぞれの運動やスポーツへの知的、技能的、感性的な深まりが、より期待できる<sup>2)</sup>と考えら

れている。そして、この段階にこそ、より高められた「個性」と運動やスポーツとの結びつきが強化されやすいと考えられている。人々が生涯にわたって、運動やスポーツを楽しむことは、今日の社会的な要求であり、この生涯スポーツとの関連を直接に意識した立場においても、選択制の必要性や有効性が考えられている。

これらの二つの立場による選択制の必要性や有効性は、選択制のもつ二つの意義でもある。そして、これらの二つの意義は、基本的には人間と運動・スポーツの結びつきを好ましい欲求充足のプロセス<sup>2)</sup>に求め、運動の特性にふれる楽しさを求めるとともに、これを保障しようとする同一線上の意義として考えられる。

このことは、単なる立場による考え方の相違としてではなく、むしろ、教科体育の目標やその営みをも含めた、教科体育の経営の枠組における、目標構造<sup>3)</sup>として位置づけられる。すなわち、中学・高校期に選択制を実施すること自体が、生徒個人のもつ発達の特性に対応するための方法論である。このことは学習指導そのものに直接関連し、教科体育の経営においては運用的決定<sup>4)</sup>の問題として位置づけられる。

また、一方で、この選択制は、「自分のスポーツを発見する」という、生涯スポーツの価値上の、この段階特有の目標そのものであり、戦略的決定<sup>5)</sup>の問題として位置づけられる。

この選択制に対する、明確な位置づけと、その相互の関連性を明らかにすることが、教科体育の経営の求める「いかにすべきか」、「なにをなすべきか」の意志決定上の有効な指針を示すと考えられる。

本研究においては、中学校3年生を対象に実施されている選択制の事例を分析し、生涯スポーツとの関連からの戦略的決定に基づく、効果を考察し、その具体的な指標を求めることを第一の目的としている。また、その効果指標に基づく、運用的決定としての授業のあり方の方向を明確にすることを第二の目的としている。なお、学校のもつ施設や教師の制約条件との関連を含めた、システムズ・アプローチ<sup>6)</sup>については今後の課題とし、本研究での運用的決定に関する考察は、選択制の授業をめぐる範囲とする。

## 研究の方法

### 1 アプローチのしかた

選択制を実施している東京都のF中学校3年生に対して、選択制開始前と終了時に、「個人の条件」、「選択制の授業に対する意識」、「体育・スポーツに関する認知」、「選択制の授業の内容」に関する調査を行なった。調査期日は、1981年11月、12月、2月であり、有効調査票数は155であった。

この調査結果の分析をもとに考察したが、まず、授業によって変容すると考えられるアイテムから変容パターンを求め、このパターンをもとに選択制の効果指標を求めた。効果指標と生涯スポーツの関連性を考察し、戦略的決定としての検討を行なった。

### 2 効果について

授業において変容すると予想される「ゲーム内容」、「スポーツに対する認知」、「種目に対する意識」、「授業に対する意識」のアイテムを林数量化III類<sup>7)</sup>を用いて、授業による変容パターンを求めた。スポーツに対する認知については、杉原・嘉戸<sup>8)</sup>による「スポーツに対する態度調査」をもとに、加賀<sup>9)</sup>らによるマズローの欲求階層説を基本にした運動の楽しさを調査項目とした。この25項目を授業前と後で測定し、それぞれ因子分析を行なった。抽出された因子を比較考察するとともに、因子スコアの選択種目に対する意識に対する意識別の比較を行ない、考察した。因子分析は主因子解によるバリマックス法で行なった。

### 3 要因分析について

求めた効果指標を外的基準とし、その効果を説明する要因分析を行なった。説明変数、外的基準とも、質的データのため、林数量化II類<sup>11)</sup>を用いて分析した。主なアイテムは「個人の条件」「運営に関する意識」「授業における変容」、「授業の内容」である。

## 結果と考察

### 1 変容パターンと効果について

体育の授業においては、運動の技能の高まり、スポーツに対する理解の深まり、種目に対する意識の好ましい変容が期待されている。選択制の授

TAB. 1. 生徒の変容アイテム・カテゴリーと各ケース数

		ケース数(人)
P: 種目に対する意識	1, より好きになった	104
	2, 変わらない	45
	3, 嫌いになった	4
M: 授業の楽しさ	1, 楽しかった	136
	2, 楽しくなかった	19
G: ゲーム内容	1, よく意図的プレーができた	43
	2, 時々意図的プレーができた	70
	3, 意図的プレーができなかった	12
	4, 何をしているのかわからなかった	27
C: スポーツの認知	1, 楽しくない	34
	2, 運動の一般的楽しさ	18
	3, 運動の社会的楽しさ	30
	4, 運動の特性にふれる楽しさ	72

業においては、さらに個人の条件との関連で、これらがどのように変容するかが中心的な関心事となる。

まず、生徒がどのような変容をし、それらの変容の要素がどのように結びついてパターンをなすかである。表1は授業による変容に関するアイテム・カテゴリーである。これらのアイテム・カテゴリーは単独で強い変容を示すものも考えられるし、あるいは相互に関連しあって変容するものも考えられる。ここではこれらをひとまとめにし、変容パターンを求めた(スポーツの認知のカテゴリーについての詳細は、後述する)。図1はそのパターンを示している。

図はI軸とII軸による平面図示であり、この方法によって求められたパターンはA, B, C, Dの4つである。

まず、パターンAは、ゲーム内容としては、「意図的プレーがよくでき」、スポーツに対する認知は、「運動の特性にふれる楽しさ」である。種目に対する意識が「以前よりも好きになった」であり、これらが組み合わされたグループである。

パターンBは、ゲーム内容が「時々意図的プレーができ」、スポーツに対する認知は、「多くの友人とスポーツを楽しむ」などの社会的要因に楽しさの期待があり、スポーツ種目そのものよりは授業が楽しかったグループであると考えられる。

パターンCは、ゲーム内容が「意図したプレーや作戦を生かすことができなかった」であり、ス

ポーツに対する認知は「運動の一般的楽しさ」か「楽しくない」である。種目に対する意識も「以前と変わらない」というグループである。

パターンDは、ゲーム内容が「何をしているのかわからない」といった、プレーに対する意図性がなく、授業についても「楽しくなかった」である。そして選択した種目に対しても「きらいになった」という、望ましくない変容パターンのグループである。

これらの4つのパターンからは、種目に対する意識のPと、スポーツに対する認知のCゲーム内容のGとは、明確な関連性があると推定される。

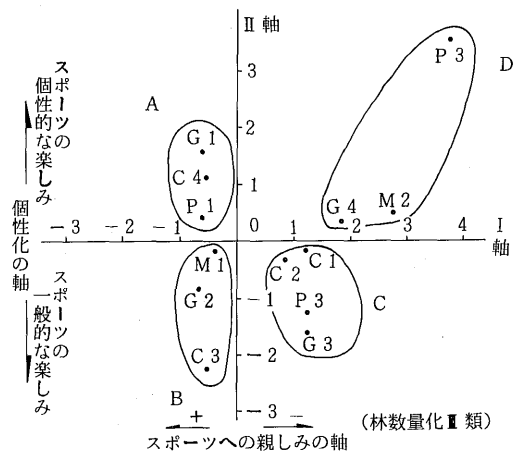


Fig. 1 選択制による変容のパターン分類

この分類に用いたI軸とII軸については、P, G, M, Cの変容要素を手がかりに特有の意味として解釈することができる。まず、図の左右を規定するI軸は、左側に位置するA,Bと、右側に位置するC,Dの2つに分類される。左側のA,Bは、授業や種目に対する意識やスポーツに対する認知が好意性を示している。一方右側に位置するC,Dは、種目に対する意識が変わらなかつたり、以前よりも嫌いになったり、あるいは、授業がつまらないとしている。この意味から左右を規定するI軸はスポーツに対する親しみの軸として解釈することができる。マイナスの方向はより親しみの強い方向を示し、プラスの方向は親しみのない方向を示している。

また、図の上下を規定するII軸にも意味を見いだすことができる。運動そのものに対する楽しさを認めていない。自分のプレーに対しての明確な意図がなく、そして、体育の授業に対してつまらなさを感じるグループのDと、まったく反対で最

も望ましい変容と考えられるグループAが上方に位置している。

一方I軸の下部、すなわちII軸の下方(マイナス方向)に位置するパターンB, Cは、授業が楽しかったり、運動そのものが楽しかったり、あるいは、認知が社会的な楽しさであるか、スポーツの一般的楽しさであり、意図的プレーの出現もほどほどであると解される。したがってII軸は、P, M, C, の配置から個性化の軸と解釈された。プラスの方向、上方は、個性的な楽しさを示し、下方は、一般的な楽しさを示している。

これらの楽しみのI軸と、個性化のII軸によって分類された先のA, B, C, D 4つのパターンはそれぞれ明確な特徴を持っていると考えられる。スポーツへのより親しみと楽しみの個性化を合わせもつAグループは、スポーツに対する深い理解をもち、高いレベルの欲求充足を期待し、自分の意図したプレーをこなせるといった体育の学習指導が求める高い能力を身につけていると考えられ

TAB. 2. 選択制開始前のスポーツに関する認知の因子分析結果

F	因子	アイテム	F1	F2	F3	F4	h <sup>2</sup>
1	一般的なスポーツの価値観	C12 思いやりのある人間になる	.7913				.7038
		C10 礼儀正しい人間になる	.7676				.6780
		C18 意志のしっかりした人間になる	.7225				.6176
		C17 正々堂々とした行動をとる	.7148				.6995
		C 8 明るく活発な性格になる	.6534				.6290
		C 7 悪いことをしなくなる	.5965				.5772
		C11 仲良しの友達ができる	.5255				.5254
		C23 粘り強くがんばる力が身につく	.5229				.6185
		C21 助け合い協力しあう態度が身につく	.5086				.4817
2	運動の楽しさ	C 1 思いきり運動ができて楽しい		.7906			.7164
		C 3 汗をかいてすっきりする		.7615			.7039
		C 2 生活が楽しく豊かになる		.7049			.5578
		C 9 クラスの仲間とゲームや競争ができて楽しい		.6436			.5775
		C 6 仲間と一緒に運動できる		.5960			.5365
		C25 自分の記録が向上して楽しい		.5272			.5691
3	スポーツの弊害的側面	C15 乱暴になる			.7279		.5709
		C24 自分勝手な人間になりやすい			.6998		.5016
		C 4 時間・エネルギーの無だになりやすい			.6484		.5144
		C20 人のいいなりになりやすい			.5726		.4540
		C 5 勉強に影響を与える			.5340		.4423
4	承認の喜び	C16 うまくできたり、勝ったりしてほめられて楽しい				.5159	.3382
因子寄与率 (%)			63.5	16.7	9.7	5.9	

る。

そして、種目に対する意識も望ましく、スポーツに対する親しみと、個性的な楽しみ方を合わせもち、生涯スポーツに対する最も有効な変容グループであると考えられる。

Bグループについては、運動そのものよりも、「授業が楽しく」種目に対する意識の変容が介入しないグループである。すなわち、授業における仲間との交流や、それにとりまわり雰囲気を楽しみ、体育の授業には親しみを持っているグループであり、個性的な運動そのものへの親しみというよりは、一般的な楽しみ方を求めている。運動やスポーツへの親しみはあるが、主体性の点から、生涯スポーツへ向けての能力は今一歩と考えられる。

Cグループについては、スポーツに対する欲求が、より高次のものではなく、「力いっぱいやればよい」とか、「体を動かすのが好き」といった一般的な楽しさが支配している。ゲーム内容についても意図的プレーや作戦を、意識するけれども達成できないグループである。そして、種目に対する意識も以前と変わらないように、選択制の授業があまり生かされなかったグループであると考えられる。

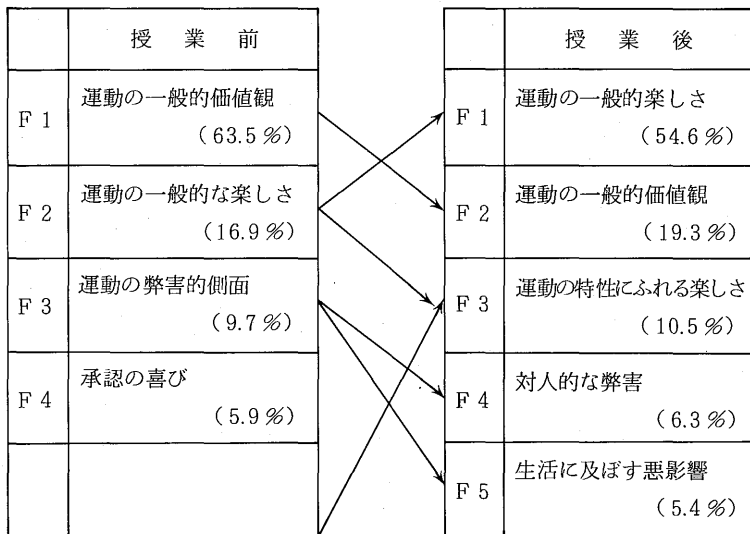
Dグループは、体育・スポーツに対する期待ははじめからなく、おつきあいとしての主体性のない授業を受け、やればやるほどきらいになるグループであると考えられる。最も望ましくない変容パターンであることはいうまでもない。

これらの4つの変容パターンの特徴から、とくにパターンAのなかに、スポーツの個性的な楽しみや、より親しみの意味が含まれ、後の段階へのつながりとしての生涯スポーツとの関連性を十分に予測することができると思う。

また、この後の段階へのつながりとともに、その段階における運動やスポーツへの、高まりや深まりが、体育の学習指導上の重要なポイントの1つとなる。

学習指導の研究を中心に、生徒が運動の経験をとおして、どのように運動を内面化したかを確かめる方法として、よく認知の変容が検討される。図1の変容パターンのアイラム・カテゴリーとしても認知の関連が認められたが、ここでは、さらに選択制の授業を通して認知がどのように変容したかを検討し、選択制の効果を考察する。

表2は、授業前に行なった体育・スポーツの認知に関する因子分析結果である。第一因子は、表



注：( )内は寄与率

Fig 2 選択制前後の認知因子の変化

に示すように、規範的な人間特性、行動特性のアイテムが因子を形成している。これらのアイテムを総合し、「一般的なスポーツの価値観」と解釈した。第2因子は、運動がどのように楽しいかを示すアイテムの集まりである。「力いっぱいやる」、「友人達と楽しむ」、あるいは「自分の意図の達成」、「他人との競争」の喜びが含まれ、広く「運動の楽しさ」と解釈した。以下第3因子は、「スポーツの弊害」、第4因子「承認の喜び」として抽出された。

表3は、選択制の終了時におけるスポーツに関する認知の因子分析結果である。ここでは、授業前では第2因子であった「運動の楽しさ」が「運動の一般的楽しさ」と「運動の特性にふれる楽しさ」の2つの独立した因子として出現している。このことは、選択制の実施により、広く漠然とした楽しさが、2つの異なった因子として分化し、より明確に認知されるように変化したものと考えられる。

また、スポーツの弊害についても同じように、

そのアイテムの構成が異なっているといえよう。図2は、これらの選択制の前と後に抽出された因子の構成と、その移動を示している。授業の前には、スポーツの一般的価値観が大きく支配して

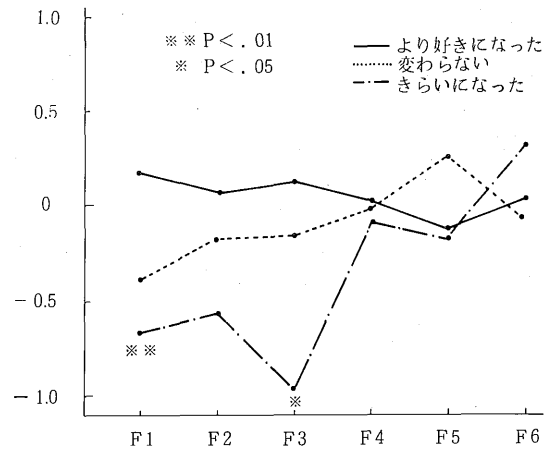


Fig. 3 種目の意識グループ別因子スコア

TAB. 3. 選択制実施後のスポーツに関する認知の因子分析結果

F	因子	アイテム	F1	F2	F3	F4	F5	h <sup>2</sup>
1	運動の一般的 楽しさ	CC 1 思いきり運動ができて楽しい	.7523					.6302
		CC 2 汗をかいてすっきりする	.7370					.6508
		CC 3 生活が楽しく豊かになる	.7085					.6359
		CC 9 クラスの仲間とゲーム・競争ができて楽しい	.6565					.5913
		CC 6 仲間と一緒に運動できる	.6036					.5140
2	一般的なスポーツ の価値観	CC 12 思いやりのある人間になる		.8729				.8343
		CC10 礼儀正しい人間になる		.8112				.7222
		CC17 正々堂々と行動できるようになる		.7037				.8028
		CC 8 明るく活発な性格になる		.6439				.6288
		CC18 意志のしっかりした人間になる		.5735				.6779
3	運動の特性にふれる 楽しさ	CC16 うまくできたり、勝ったりしてほめられてうれしい			.6229			.4747
		CC22 どうしたらうまくできたり勝ったりできるか工夫するのが楽しい			.5652			.5529
		CC19 今までできなかったことができるようになる			.5627			.5346
		CC25 自分の記録が向上して楽しい			.5411			.4575
4	対人的な弊害	CC15 乱暴になる				.7463		.5877
		CC24 自分勝手な人間になりやすい				.7018		.5180
		CC20 人のいいなりになりやすい				.5922		.4255
5	生活への悪影響	CC 5 勉強に影響を与える					.9255	.9736
因子奇与率 (%)			54.6	19.3	10.5	6.3	5.4	

いるのに対して、授業後では、「運動の楽しさ」から分化した「運動の一般的楽しさ」が第一因子として大きく寄与している。第3因子として授業の前にあらわれなかったアイテムとともに「運動の特性にふれる楽しさ」が出現している。このことは、先の運動の因子の分化とともに、選択制の実施により、スポーツの認知がより強く、そして明確に変容したことが考えられる。これらのことは、選択制による認知上の効果として認められる。したがって、選択制によるこの認知上の変容とともに、先の生涯スポーツとの可能性を考え合わせれば、パターンAへの変容を前提に、選択制による望ましい効果が認められる。

## 2 効果の指標について

人間の欲求一充足が階層をなし、体育・スポーツにおける楽しさにも、その階層性があることを前提に考えるとすれば、マズローの言う「自己実現」のレベルでの、「運動の特性にふれる楽しさ」が、大きく支配する可能性が残されている。少なくとも、「運動の一般的楽しさ」よりも明確に、そして、大きく寄与させる授業のあり方が求められる。そこに教科体育における運用的決定に委ねら

れる選択制の授業の可能性を見出すことができると考えられる。

先に、選択制の効果として、スポーツの認知、ゲームの内容、選択した種目に対する意識の変容の一連のパターンを考察したが、効果の指標を求める意味でのこれらの関連について検討する。

図3は、選択した種目に対する意識と認知の関係を示している。意識のグループは(1)より好きになった (2)変わらない (3)きらいになったの3つである。これらのグループ別の「因子分析による因子スコアを算出して比較している。F1~F6は、授業後における表3の各因子である。この種目に対する意識の変化の3つのカテゴリー間の比較では、第一因子である「運動の一般的な楽しさ」と第3因子である「運動の特性にふれる楽しさ」に有意な差が見られる。(F1: P<.01, F3 P<.05)

このことは、種目に対する意識のちがいはスポーツに対する「運動の楽しさ」のちがいに集約されるとともに、意識の変化をもってスポーツの認知を推定することができると考えられる。

また、表4は種目に対する意識とゲーム内容の関係であり、両者に有意な関連があることを示し

TAB. 4. 種目の意識とゲーム内容の関連

P	G	1	2	3	4	TO,
1	35 23.2%	53 35.1	6 4.0	9 6.0	103	
2	7 4.6	16 10.6	6 4.0	14 9.3	433	
3	0	1 0.7	0	3 2.0	4	
4	0	0	0	1 0.7	1	
TO,	42	70	12	27	151	

MISS. CASES=4 P<.01

- G : ゲーム内容
- 1、よく意図的プレーができる
  - 2、時々意図的プレーができる
  - 3、意図的プレーができない
  - 4、何をしているかわからない
- P : 実施種目の意識の変化
- 1、より好きになった
  - 2、以前と変わらない
  - 3、つまらないと思う
  - 4、わからない

TAB. 5 選択制の効果による要因分析結果  
(アイテム・スコア)

ア イ テ ム	偏相関係数	順位
性 別	0.1224	6
得意・不得意	0.0505	10
階 層	0.0486	11
選択種目	0.2494	3
楽しさへの認知	0.2729	2
ゲームの勝負	0.1071	7
楽しかった理由	0.2344	4
終りころのゲーム内容	0.4032	1
後期への工夫	0.0774	8
種目選択の理由	0.2073	5
体育成績	0.0704	9

\* 相関比 = 0.581  
(林数量化II類による分析)

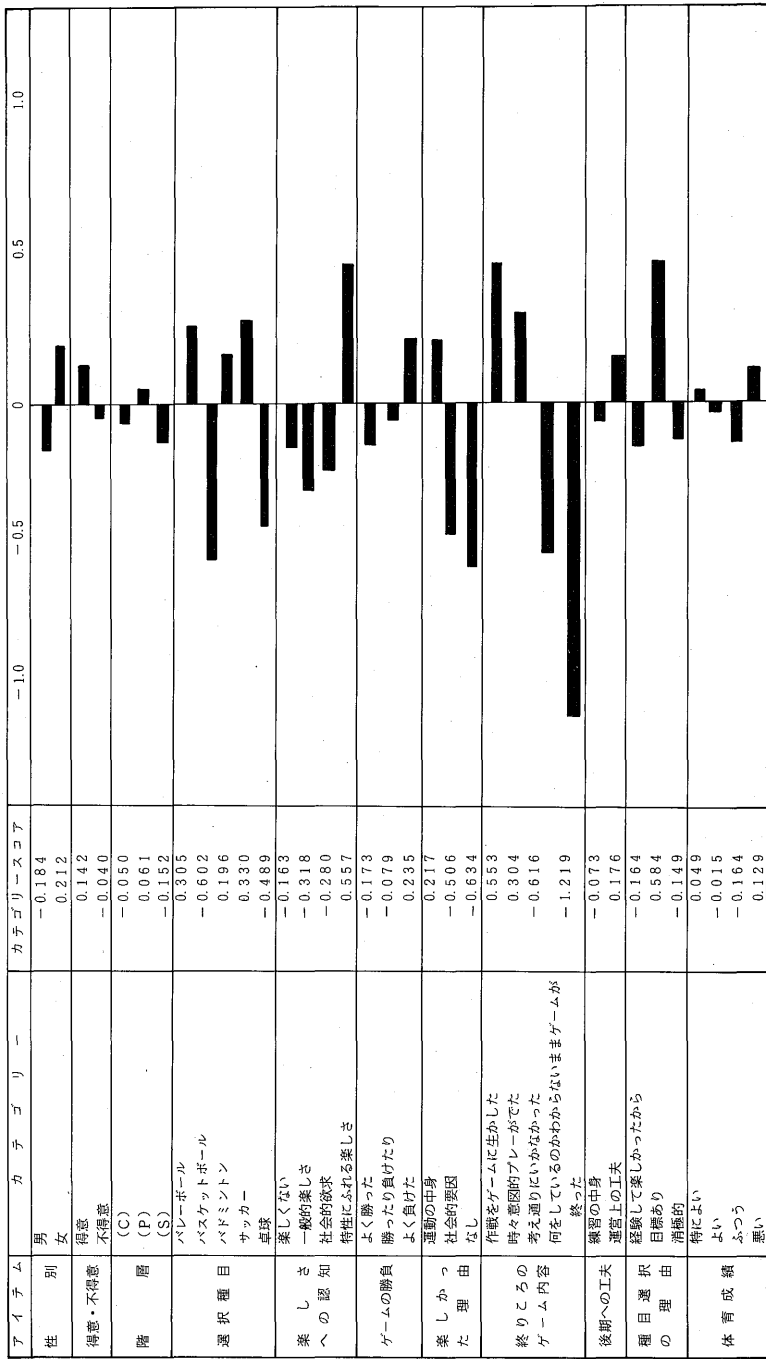


Fig. 4 選択制の効果による要因分析結果(カテゴリー・スコア)



ている。(P<.01)

これらのことから、変容のパターンの中での種目に対する意識の変化と、スポーツに対する認知やゲーム内容に有意な関連性が認められ、意識の変化をもって効果を代表させることができると考える。すなわち、種目に対する意識の変化が、選択制の有効な指標であることを意味している。

### 3 効果の要因分析結果について

求めた効果の指標のもとに、選択制の効果を規定する要因がどのようなものであり、どのような強さを示すかを検討する。このことは、とくに、選択制の授業をどのように行なったらよいかその有力な方向を見つけ出す意味があると考えられる。

表5・図4はその要因分析の結果である。効果指標としての種目に対する意識の変化を外的基準とし、説明変数は、表5、図4に示す各アイテム・カテゴリーである。

まず、表5は外的基準を規定すると考えられる各アイテムの偏相関係数とその順位である。数値の高いアイテムがその規定力が大きいことを示している。規定力のとくに大きいものとして、先にのべたゲーム内容とスポーツに関する楽しさの認知である。以下、選択種目、楽しかった理由、選択した理由と続く。先の図1のパターン分類の結果において、種目に対する意識の変化とスポーツの楽しさの認知、ゲーム内容が選択制による変容パターンとしての一つのグループを形成していたが、ここでは、さらに選択種目、種目選択のきっかけが関連しあって効果を生み出していることが考えられる。

一方この偏相関係数の小さいもの、すなわち、効果に対する規定要因となりにくいものは、性別、体育の得意・不得意、運動生活、体育の成績の各アイテムである。これらのアイテムは、個人の属性や能力としての個人の条件であり、この個人の条件が効果としての種目に対する意識の変化に規定力をもたないということを示している。したがって中学校3年生においても、選択制を実施することによって、個人の条件がかなり吸収されると考えられる。

さらに、各アイテムのカテゴリーがどのような意味をもっているかを考察する。図5は数量化された各カテゴリースコアを示している。この数値

の絶対値が大きいほど、そのカテゴリー規定力が大きいことを示している。プラスの方向は、選択した種目がより好きになる方向を示し、逆にマイナスは「好きにならない」方向を示している。

まず、規定力の大きいカテゴリーは、ゲーム内容として「作戦や意図的プレーができた」であり、スポーツの楽しさの認知が「運動の特性にふれる楽しさ」であり、そして、種目選択の理由が「向上の目標をもって選択した」である。すなわち、種目が以前よりも好きになったとする生徒は、種目を選択する場合になんとなく選択したり、友達にさそわれてではなく、又、以前の楽しい経験のみでもなく、もっとうまくやりたい、より高度なゲームを楽しみたいという運動そのものに対する向上の目標を持っているといえる。

また、スポーツの楽しさの認知は、「汗をかいてすっきりする」、「力いっぱい体を動かして楽しい」、あるいは「友人と楽しめる」といった欲求充足ではなく、加賀<sup>9)</sup>らによる自己実現型の運動の特性にふれる楽しさの欲求充足である。したがって階層性をなすとされるスポーツにおける欲求充足の中での、最も高い層の欲求充足の認知が不可欠であると考えられる。そして、授業におけるゲーム内容は、「意図的プレーや作戦を生かした」か、あるいは「時々意図的なプレーができた」であり、「考え通りにいかなかった」や「何をしているのかわからないうちに終わってしまった」とは大きく区分されている。

すなわち、自分のめあてとしての意図的プレーの実現が要求され、その頻度が高いことが大きな意味をもつと考えられる。

### 結 論

本研究による考察の結果、次のような結果を得た。

1. 選択制を実施することによって、個人の条件に対応しやすくなるという最も基本的な意味を見出すことができた。
2. 選択制の実施により、中学校3年生の、その段階でのスポーツの高まりや深まりが確認されるとともに、後の段階へのつながりの視点からの、スポーツの個性的な楽しみや親しみをあわせもつ変容パターンを見出すことができた。これらは生涯スポーツへの有効な関連性がある。

り、選択制のもつ効果であると考えられる。

3. 選択制による種目に対する意識の変化が効果の指標として有効であり、意図的プレーが実施される高度なゲーム内容と、高い欲求充足を期待するスポーツの認知が関連しあっている。教科体育の経営において、選択制を導入するかどうかの戦略的意思決定においては、前提条件としてこれらの能力についての検討が必要である。
4. 運用的意志決定としての、より大きな効果を期待するための選択制の授業の改善の目は、生徒がいかに意図的プレーをゲームに生かすかに向けられる必要があり、生徒自身が意図的なプレーを求め、それが実現されることを中心にした学習指導が求められる。

また、本研究が残した課題は、次のようにまとめられる。

1. 選択制に望まれる、より具体的な学習指導法を求める必要がある。
2. 本研究では効果を中心に考察したが、今後はさらに選択制の授業が通常の授業に比較して、効率の面ではどうかについて検討する必要がある。

3. 種目によって効果が異なるが、その関係についても究明しなければならない。

#### 参 考 文 献

- 1) 宇土正彦「体育学習の選択制の考え方扱い方」 体育科教育, 1981年4月 P.59 大修館書店
- 2) 佐伯聰夫「放任授業から主体性を生かす授業へ」 体育科教育, 1981年5月 P.66 大修館書店
- 3) 高宮晋(編)「経営学辞典」ダイヤモンド社 1970年3月 P.426
- 4) 藤田恒夫「システム分析の基礎」 酒井書店 1975年6月 P.8~9
- 5) 今村和男(編)「システム分析」 日科技連 1977年7月 P.14
- 6) 土屋守章(編)「現代の企業戦略」 有斐閣 1982年4月 P.4
- 7) 林知己夫・村山考喜「市場調査の計画と実際」 日刊工業新聞社 1964年8月
- 8) 杉原隆・嘉戸脩「スポーツに対する態度」 学校体育 1981年11月号 P.127~P.132 体育社
- 9) 宇土正彦・山川岩之助(編) 加賀秀夫「小学校体育の展開(総説編)」 大修館書店 1978年10月 P.154~P.156
- 10) 芝祐順「因子分析法」 東大出版会 1979年1月
- 11) 三宅・中野・水野・山本「SPSS統計パッケージ(解析編)」 東洋経済新報社 1977年9月